

# 茶の湯文化学会会報 No.5

第5号 / 1995年4月1日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314

## 震災お見舞い

まことに青天の霹靂でした。京都に住む者にもあの朝の恐怖は今もよみがえって参ります。被災地の皆さまに心からお見舞いを申しあげますとともに、不幸にしておなくなりになりました方々の御冥福をお祈りいたします。

茶の湯文化の世界にも激震の影響は及び、その爪跡が意外に広いことがわかって参りました。阪神地方は茶の美術の大宝庫であります。

香雪美術館の名物の玉石塀は大きく崩れ痛々しい佇いを見せております。重美の石仏が破損しました。大坂出光美術館では展示中のパウアーコレクションに被害があり、数点は修復不能の由です。芦屋のエンバ中国近代美術館における中国陶器の破損は三千点にもなるそうです。その他諸施設の収蔵品の被害は枚挙に限りがないでしょう。

その上世に出ない個人のお宅での被害も少ないことも想像されます。また初釜の時期であったことも名品にとって不幸でした。日が経つにつれ残念な情報に接します。

京都もまた無被害ではありませんでした。一部の地域では建物の損壊もありました。茶の家元では、北の

三千家はすべて安泰でしたが、南の藪内家では露地(名勝)の石灯籠八基が倒れ、中には飛石に撃突して竿が折れたものもありました。幕末類焼時に火を浴び石質が脆くなっていたようです。燕庵をはじめ建物には何の損傷もありませんでした。灯籠も織部灯籠の形式のものは無事でした。織部灯籠は地中に竿を掘立てているからです。桂離宮は、石灯籠もほとんどが織部式で皆安泰でしたが、建物には一部壁面に亀裂を生じました。

天災はさまざまな人災を惹起して被害を増大するという現実を、今回私たちは直視させられました。都市防災、構築物の防震といった次元だけでなく、茶の文化を守るという観点からの防災の姿勢と手段を研究し確立することが急務となりました。

また災害が生じた際、迅速で有効な対策を打ち出すのがいかに難しいことであるかも痛感致しました。当学会としても将来不幸にして被害に遭った茶の湯にかかわる文化財に対して、迅速かつ適切な手段を講ずることができるよう検討すべきであると思えます。

今回の不慮の苦しい経験から天災を克服する英知を生み出そうではありませんか。

茶の湯文化学会 会長 中村昌生

## 震災の地を訪れて

谷 晃

私はこのたびの地震が発生した直後にリュックをかついで神戸の町に入った。テレビの画面でその被害の大きさに愕然としたものであったが、実際にその惨状を目のあたりにした時、ぬくぬくとした部屋でテレビを見ていた自分を恥じたものである。テレビの前に坐っている時には決して浮んではこなかった想いが次々と頭の中をよぎっていく。

西宮北口から三時間を要してたどりついた美術館とその周辺の惨状もまた目を覆わんばかりであった。泊り込みになることも覚悟のうえで、何か手伝うことはないかとかけつけてはみたものの、自分の気負いだけが空まわりをした結果となってしまった。東京からやって来た美術館関係者も、さほどの結果をあげずに引返さざるを得なかったとの話をあとから聞いたこともある。

もちろん地道に文化財の救援に活躍した個人や団体もあったのだが、全体としては緊急度に応じて何から手を付けるべきかの優先順位の決定、現地に入った、あるいは入ろうとする人間を掌握して割り振ること、被災者の

生活支援と文化財の保護とのかねあいなど、もっとも基本的で重要な事柄が組織的に行われた形跡は皆無に等しく、個人やグループが手さぐりの状態で行い、それが現在も続いているといわざるを得ない。

それはこれまで文化財保護といえば火災と盗難のいわば人災から守ることが中心であった、天災からいかにすれば文化財を守ることができ、また不幸にして被害を受けた文化財を緊急に救うためには何をすべきかとの発想がなかったからといわれても仕方あるまい。そうした研究や実験がほとんどなされていなかったのだから。

いま私の手もとには「Perspectives on Natural Disaster Mitigation」と題するぶ厚い報告書がある。これは阪神大震災が発生してすぐに、アメリカから「何でもするから必要なことがあれば要請してほしい。我々には知識と技術の蓄積がある」とのメッセージとともに日本へ送られてきたもの。その内容は地震ばかりでなく、台風や洪水などの自然災害から文化財と、それを収容する建物をいかにして守るべきかをこと細かに書いた論文集である。文化財の防災に対する彼我の意識と準備の差は歴然としている。

## 平成六年度第二回研究会報告

平成六年度第二回研究会に先だって、第三回理事会が京大会館において開催された。中村昌生会長以下十四名が出席し、平成六年度事業報告及び会計報告、平成七年度事業案及び予算案について審議し、承認された。主な内容は次の通り。

会誌の頒布は全員に限ることとし、部数の制限はしない。創刊号の三千円を基本価格とする。

会報は投稿が増えており、現行四頁を六頁立てにする。

平成七年度は五月下旬に総会を開催する。会場は宇治とし、見学会を組み合わせる。

研究会は夏と二月に行い、そのうちの一度は東京で開催することを検討する。

大会は十月か十一月に京都で開催する。なお、その他の事項として国際学術交流に関する案内がなされ、審議の結果、中国、香港などの六研究組織と機関誌の交換などを行うことが承認された。

## 第二回研究会報告

平成七年二月十二日、午後一時半より京都市左京区にある京大会館で第二回研究会が開催された。阪神大震災によって阪神間の交通が分断されたままであり、参加者が少ないのではないかと心配されたが、結果的には会員六十四名、会員外二十一名の計八十五名が参加し、準備した椅子が足りなくなるほどの盛況であった。

ただ予定していた南京農業大学の朱自振氏がビザ発給の遅れで来日が間に合わず、残念ながら中止の止むなきに至った。しかし通訳を勤めていただく予定であった北京外国語学院の東 君氏に急拠発表していただくよう交渉したところ、快く引き受けられ、谷端昭夫氏とともに予定通り二本の研究発表ができることになった。

林屋副会長の挨拶のあと、東氏が「茶と神仙思想」、谷端氏が「井伊直弼関係茶会記の紹介」のテーマでそれぞれ一時間の発表と三分ほどの質疑応答が行なわれた。

両氏の発表内容の概要は以下の通り。

### 発表1

#### 茶と神仙思想

東 君

民族宗教たる道教はきわめて中国的なものである。その思想には大きな三つの特徴がある。まず死を認めず永遠の生ととらえること、現世を苦界と見る他の宗教とは異なり楽園と見ること、そして仙人像を求めることである。特に仙人像を求める考え方によって古来よりいかにすれば仙人になりうるかとの研究がなされたのだが、ある薬を飲むことによって永遠の命を保てるのではないかと、様々な工夫がなされてきた。また仙人にもランクがある。当然のことながらより高いランクの仙人になることが願われたのである。

しかし当然のことではあるが確実に仙人になれる薬はなかなかできず、なかには仙人になれると信じて飲んだ薬のためかえって命を縮めてしまった皇帝もたくさんいた。

そうした仙薬は金丹・金液と呼ばれたのであるが、成分としては鉱物性のものと植物性のものがあり、植物の研究がいわゆる本草学に発展していく。その中でも特に茶が目ざされて、その仙薬的効能が説かれ、また茶は末時代までは栽培せず採集したから、茶を摘む



## 「井伊直弼関係茶会記」の紹介

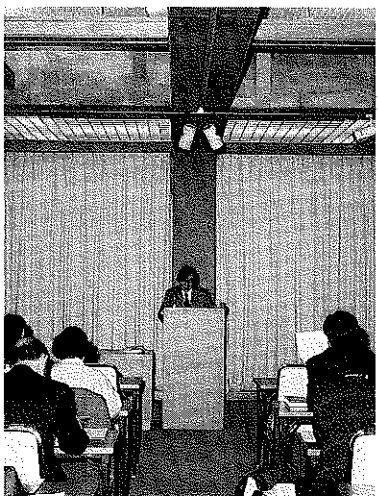
谷端 昭夫

幕末の大老として幕府をリードした井伊直弼は、茶の湯の思想を「一期一会」の語に集約させて、近代茶道への展開を準備した人物としてよく知られている。

しかしながら、これまで直弼の茶の湯研究はこのような側面に注目する所が多く、かえって直弼の茶の湯の実態面での資料の紹介や研究が遅れてしまった点は否めない。このような状況に鑑みて、ここでは彦根城博物館所蔵の井伊直弼関係茶会記の紹介を行いたい。

直弼の茶会記としては、すでに国元、彦根での『彦根水屋帳』と江戸邸での『東都水屋帳』の両種が紹介され、考察もある程度なされている。この両種は藩主・大老時代の主として自会を集め、自ら書き記したものであった。

これに加えて自・他会記を集めたものとして「毎会水屋帳」「順会水屋帳」の二冊を紹介しなければならぬ。ともに自筆ではないが、木版の茶会記用冊子にまとめられ、日時、亭主、客、道具などを書き込む形式が取られて



いる。

この茶会記で特徴的なのは、「毎会水屋帳」が、直弼から茶名を与えられていた家臣を中心に会が進められている事である。『彦根水屋帳』『東都水屋帳』には、すでに幾人かが茶名であらわれてはいるが、直弼が茶名をもった人物を中心として持ち回りで茶事を行っていた事は、その茶の展開を推測する手掛かりとなるであろう。

さらに、一冊のみではあるが、彦根・江戸での直弼の自会のみならず、藩士・奥向きの人物の会を含めて七十八会もの茶会を収録する会記もある。『懐石附』である。

この茶会記には直弼よりの拝領品を披露するがごとき趣をもった会が少なくない。直弼好みとされる日光栗山桶花生や、自作茶杓、

## 《投稿》

お茶道の心とは

増田眞美

私はこの度の地震を堺の南部に位置する我家で遭遇致しました。大屋根がすり落ち、壁は破れ、タイルはかけ落ち恐しい目に合いました。毎日／＼テレビに映る被害地の模様、被災者や懸命のボランティアの様子。私もたまらなくなつて大阪のある避難所を尋ねました。おふとんの敷きつめられた大きな体育館には友達とこたつを囲みさし入れを前に賑やかに団欒している人。小学生二人を前に今日の学校での様子を聞くお母さん。何か相談しているらしい老夫婦。そんな中に一人うつろな目で宙を眺めているお年寄り。話し相手も無いのかボートとしている方が数人おられました。私はそういう人にこそ声をかけてあげたくて行ったのですが見ず知らずの、どんな生活をしてこられたのか、又どんなにかショックを受けられた事か。私も屋根をやられ、あちらこちら修理の場所が出来たという情けなさや揺れの恐しさや暗い気持ちで一週間はどうしても足が外に出ませんでした。この方達は、家もなく、お金も、頼る所も無くどう

していいか解からない人。何とか生きる力を少しでも持って頂けたらと私のありったけの心と勇気で一人の方に声をかけてみました。とっても喜んで下さり二人、三人とお声をかけたのですが、この相手を思いやる気持ち、細かい気づきは、お茶の亭主や、半東の心と一緒に気づいたのです。私は五才の時から明治十三年生れの祖母にお茶の手ほどきを受けました。武士である父親のお茶を引き継いだ祖母にいつも「捨て湯は少なく。お先に、ありがとうございます、は大きな声で」と云われ続け守って参りましたが、最近お年寄りの先生に「そんな少ないお湯ではお茶碗きれいにならないでしょう」と云われました。お年を召した先生ですらそんな風です。池坊の宗匠は桜は咲き誇っている時はきれいだ散った後は他の物と一緒に相寄って流れに添って流れて行く。人も慢心を持って盛りと誇っている時は解らないが衰える時もある。その時は他の者に相寄る心を知れ。と話され、その意を受けて紹鷗は水盤に浮かした桜を愛した、と云う事を何かで読みました。お茶室に居る時は「ありがとう」「お先に」は言っても知らない人にはなか／＼言えません。先にいう咲き誇っていた人も漂って居た人もこの度

自詠和歌などが多く使用されており、中には現存作品と合致する物もいくらか見られる。その意味では直弼の好み茶道具の全体像や下賜のありさまを知ることができであろう。直弼最晩年の茶会記としては安政六年の茶会を記した二冊が知られている。安政六年の關係茶会はこのみであるから、貴重な記録である。

このほかにも、手控えとして記された茶会記がいくらか残されているが、これまで知られる直弼関係茶会の合計は十年間におよそ二百会強。これらの内、直弼が亭主となった会は四十五会、客として出席した茶会数は百十一会に及ぶ。

これら直弼の茶会を年代別に見てゆくと、嘉永四年には一会だけの茶会数であるにもかかわらず、安政四年には自・他会を含めて五十会に及び、没する万延元年には五会と減少している。安政四年前後が直弼の茶の湯の、最も充実していた時期であったともいえよう。

今回は直弼の茶会の基礎的な紹介を中心に報告を行ったが、今後はこれらの茶会記を検討するなかで、直弼の茶の湯のありさまを追求してゆきたいと考えている。

の災害では運命を共にしました。同じ電車に乗った人、食堂で同じテーブルにいた人、又は同じ地域に生きている人、同じ国に生れ、大きくは同じ時代に同じ地球に生きている人、みんな運命共同体です。

お茶室は宇宙を小さくしたものと伝えられている事を実感致しました。お茶は時代と共に形は変りながらも庶民の楽しみとして伝わって来ました。がここ数年はお道具にとらわれすぎ、一回のお茶会に数百万円もかけ、そういうのが良いと思う方、お金をかけて楽しむものと思いつている方、その様に指導された先生方。時代がそうさせた所もあるでしょうが、この災害を機に見知らぬ人にでも思いやりの心で、只お茶室で言っている事を声に出してみる。何万、何十万人のお茶をしていく方々がその気になればやさしい日本が出るのではないのでしょうか。言葉の中に含まれたやさしさの心は個々の体験と、お茶で云う修業は、暑い、寒い、眠い、きたない、のどが渴いた、おなかがすいた等、精神的、物理的な面でいろんながまん心を養ってくれるのかも知れません。

### 発表者の募集

大会・研究会における発表者を募集しています。大会は一題につき報告二十分、質疑応答十分、研究会は同六十分・三十分程度です。発表を希望される方がありましたら、事務局までご連絡下さい。

応募される方は八百字程度の梗概と研究会・大会応募の別を明記して事務局へ提出して下さい。

### 事務局報告

\*先日、総会のあと行う見学会の下見に宇治へ行ってきました。春うららというにはまだ風の冷たい日でしたが、それでも川面に映える光はまぎれもなく春のそれでした。

\*宇治は歴史の舞台に、また謡曲の舞台にとしばしば登場しますし、由緒ある神社仏閣も多くあります。ことにこのたび宇治上神社と平等院などが世界遺産（文化遺産）に登録されて、今年の春は観光客が増えるのではと、地元の人たちの期待は大きいようです。

\*宇治はまた、古くは宇治七園、利休の頃に

は宇治橋三の間の水の話、そして江戸時代に入るとお茶壺道中と、茶の湯に関わる話題にはこと欠きません。この宇治で今年度の総会と見学会を行いますので、皆さんの参加をお待ちします。

\*巻頭記事で会長よりお見舞い申し上げますが、今回の阪神大震災では本学会会員の方のなかにも被害に遭われた方が多数おられます。事務局からも心よりお見舞い申し上げます。

\*この大震災では人や建物だけでなく多くの文化財にも被害が出ています。現在は生活の再建が優先されておりますので、詳しい実態についてはよくわかりませんが、文化財の救援についてはよくわかりませんが、文化財の救援が構じられることをねがってやみません。

\*本号に初めて投稿原稿をいただきました。増田氏の他にも投稿原稿を戴きましたが、紙面の都合で次号に掲載することになりましたのでご諒承下さい。

\*現在会報は、四頁ないし六頁建てで発行しておりますが、投稿原稿が増えれば毎号八頁建てにすることも検討しておりますので、ふるって投稿していただき、会員相互の意見交換の場となることを願っております。

### 総会のお知らせ

平成七年度の総会を左記の通り開催致しますので、ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

日時 平成七年五月二十一日（日）

場所 宇治市生涯学習センター

次第 十一時～十二時 議事

十二時～十三時半 昼食

十三時半～十七時 見学会

見学場所 上林記念館・朝日焼資料館・

万福寺・茶室対鳳庵その他

（雨天決行）

なお詳しくは追って発送します総会案内状をご覧ください。

### 研究会予報

第三四（平成七年度第一回）研究会は七月に京都において開催する予定です。詳細は次号の会報をご覧ください。

第四回研究会は明年二月頃東京において開催の予定です。